

# ONE REINCARNATION

海賊

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日剣崎剣は後輩森人に殺されよう実の世界に転生した。

目次

1話	転生	1
2話	2度目の人生	7
3話	クラス	11
4話	自己紹介	14
5話	高度育成高等学校	18
6話	コンビニ	21

## 1話 転生

ある日、俺は死んだ。死因はハッキリとは覚えていないが、俺は誰かと信号待ちをしている時、その誰かに押され道路に出てしまった。そして、誰かの悲鳴が聞こえた。それ以降の記憶は全く持つて無かった。

何故死んだ記憶が無いのに、自分は死んだと分かったのかそれは今の現象で分かったからだ。

「君は死んだのになんか冷静だね」

俺が目を覚ましたところはアニメなどのように知らない病院の天上などではなく何も無い白い空間だった。そして寝ている俺を覗き込むかのように金髪の美少女が俺の顔を覗き込んでいた。この美少女の名前はアイリス自称「神」だそうだ。

「まあ、辛うじて覚えている記憶を繋げると、俺は死んだっていう結論に辿り着くしな」

「へえー、君は結構珍しい子だね」

「そうか？」

「ああ、今まで何人もの死んだ子にあったけど、ここで「君は死んだ」って伝えたら全員が取り乱してたよ」

「だろうな」

普通に考えてそうだろう。誰だって何も無い空間で目を覚まして知らない自称神と名乗っている美少女に「お前は死んだ」と言われれば取り乱すだろう。ただ、俺は自分で言うのもなんだが人より少し冷静に物事を判断できる。俺はそんなことを考えていると死んだ記憶をハッキリと思い出した。俺を押しした誰かとは部活の後輩もりと森人だった。俺はコイツの彼女と少し親しくしていただけなのにネットに顔写真や住所を晒され殺されたんだ。

「で、俺はどうなるんだ、天国に行くのか？それとも地獄に落とされるのか？」

祖母に小さい頃教えてもらったことある。それは、人が死ぬと必ず天国か地獄に行くということだ。天国は空の上であり神や天使など

が居て優雅に生活ができる。地獄は天国とは反対で地面の下にあり閻魔大王や鬼などがいて毎日毎日休む暇もなく拷問されるといふのだ。これを聞いた俺は地獄だけには落ちたくないと思った。いくら人より少し冷静だと言っても毎日拷問は流石に無理だ。

「いえ、君は天国にも地獄にも行きませんよ」

「じゃ、どこに行くんだ？まさか、俺を生き返らせてでもくれるのか？」

「ええ、そうですよ」

「……マジかよ」

アイリスの答えは「どちらでも無い」だった。俺はそれを聞き冗談半分で「生き返られさせてくれるのか」と言ってみた。すると、アイリスは「そうですよ」と答えた。まさかの答えに俺は驚愕してしまった。「元々、この空間で目を覚ました人は違う世界に転生されるんです」「違う世界？それって別の世界で生き返られさせてくれるってことか？」

「ええ、現実世界でアナタが生き返ったらおかしいですからね、そのため違う世界で生き返らせて第2の人生を送ってもらうんです」

「なるほど、第2の人生ね」

どうやら、俺が生き返るのは現実世界ではなく現実世界とはまた別の世界らしい。まあ、記憶には無いがトラックに轢かれれば普通に考えて即死だろうな。そんな俺が現実世界で生き返ったら親なんか驚いてショック死するだろうな。

「アナタがこれから転生する世界はようこそ実力至上主義の教室への世界です」

「よう実の世界か……」

「何か不満もありますか？」

「いや、何か気難しい世界だなって思ってる」

「まあ、そうですね、あの世界は名前の通り実力至上主義の世界ですから」

俺が転生する世界はようこそ実力至上主義の教室へ通称よう実の世界だ。俺はよう実のラノベ全巻読破しておりアニメも見ている。

そのため俺はよう実の世界がどんな世界かを知っている。簡単に説明すればタイトル通り実力至上主義の世界だ。実力がない者はふり落とされるといいう世界でもある。そのため俺は少し不安だった。

「ですが、心配はいりません。転生特典ガチャというものを引けますから」

「転生特典ガチャ？何だそれは？」

「説明を聞くより、実物を見た方がいいですよ」

アイリスは指をパチンと鳴らした。すると白い天上から天使の形をしたガチャが落ちてきた。どうやらこれがアイリスが言っていた転生特典ガチャらしい。なんか無駄に豪華だな。

「これは、何回引けるんだ？」

「アナタは死因が殺されたという理由なので10回引けます」

「そんなに、引けるのかよ」

「ええ、ですが、ガチャ率は悪いですよ」

俺は死因が殺人という理由だったため10回もガチャを引けるらしい。これだけは、森人に感謝だな。俺は10回もガチャを引けることに内心喜んでいてアイリスは「ガチャ率は悪いですよ」と言いながら1枚の紙を俺に手渡した。この紙はどうやらこのガチャに入っている転生特典らしい。転生特典ガチャの内容を簡単に表すところだ。

#### 転生特典ガチャ表

---

仮面ライダーのベルト 確率00.9

---

ウルトラマンの変身道具 確率00.5

---

目が二重になる 確率95.3

---

視力が今の6倍となる 確率98.6

ハートブレイカー	確率00.01
イマジンブレイカー	確率00.09
虫歯にならない	確率99.99
心が強くなる	確率89.66
フエイクセンサー	確率00.04
性転換になる	確率00.66
運動神経2倍	確率96.55
運動神経5倍	確率00.66
顔が美少年になる	確率00.10
Aクラスになれる	確率99.98
Dクラスになれる	確率00.66
天才になれる	確率00.99
伊吹澪がヒロインになる	確率10.56
頭が良くなる	確率79.65
特殊能力を得れる	確率00.69
ハゲになる	確率99.95

ガチャ表見て俺が思ったことはただ一つ。最後だけは絶対に引きたくない。

「では、100回引いてください、あっ、因みに特典は100回引いた後に教えますので」

俺アイリスの言葉を聞いたあと、最後だけは絶対に引きたくないという願いを込めて100回転生特典ガチャを引いた。

「100回引き終わりましたね、では、私がカプセルを開け転生特典を読み上げるのでしっかりと聞いてください」

「1つ目が特殊能力を得れる。2つ目視力が今の6倍になる。3つ目心が強くなる。4つ目Dクラスになる。5つ目伊吹漣がヒロインになる。6つ目ハートブレイカー。7つ目フェイクセンサー。8つ目イマジンブレイカー。9つ目天才になれる。100つ目運動神経5倍になる。」

「お、君はガチャ運が凄いいですね!!」

「なんか、確率が低いやつばかり出たけどよく分かんねえんだけど」

どうやら、俺はガチャ運が良いみたいだが、ハートブレイカーやイマジンブレイカーやフェイクセンサーさど訳の分からないものまで出てしまった。俺はとにかくアイリスに説明を求めた。

「まず、ハートブレイカーは簡単に言うともてもてになるということです。イマジンブレイカーは物理的な攻撃がほとんど効かなくなるということ。フェイクセンサーは他人の嘘が見破れるということ。とです」

なんか、凄くチートな能力が連発した見たいだ。ハートブレイカーやフェイクセンサーはまだ使えるけどイマジンブレイカーは必要性は無いだろう。よう実の世界でそんなに肉弾戦になることなんてほとんど無いしどう使えばいいんだ？

「あっ、後がつつかえてる見たいなので、さっさと転生させますね」

アイリスはまるでカンペを見たように「転生させる」と言った。さて、どうやってアイリスは俺を転生させるのか転生させる方法が気に



なるな。

「分かった、ところで、どうやって転生させるんだ？」

「こうやって、転生させるのです!!」

「えっ？」

アイリスはそう大声で言うと、どこからか取り出したのか分からない金属バットで俺の頭をフルスイングした。

「お前………」

「すいません、急いでいるのでこんな方法を取りました」

「ふざけんな………」

俺はアイリスの満面な笑顔を見たのを最後に薄れる意識の中アイリスに悪態を口にし意識を失った。

## 2話 2度目の人生

「!??!?!?!?!」  
「うわあああああ!!」  
「!!!」

俺は大声を出しながら目を覚ました。すると、俺が目を覚ましたのはバスの中だった。どうやら、1巻で繰り広げられる櫛田と高円寺の言い争いがみれるようだ。だが、今俺は乗客全員の視線を釘付けにしている。まあ、それもそうだろう。誰だっていきなりバスの中で大声を出されたらその大声を出した奴を見るのは当然だ。

「.....す、すみません」

『.....』

俺は取り敢えず、バスの乗客全員に謝罪をした。一応謝つとかないと後でうるさいからな。俺が謝罪すると乗客全員は何一つ言葉を発さず視線を俺から外やスマホや本などに移しそれぞれ目的地に着くまでの暇潰しを再開した。

：

「席を譲ってあげようって思わないの?」

あれから10分ほど時間が経った時、女性の声が車内に響き渡った。どうやらOLと高円寺の優先席についてのやり取りのようだ。

「実にクレイジーな質問だね、レディー」

「なぜこの私が、老婆に席を譲らなければならないんだ?」

「君が座っている席は優先席よ。そこはお年寄りに譲るのが当然でしょ?」

「理解できないねえ、優先席は優先席であって、法律には譲らなければならないというものは存在しない」

OLが言っていることも一理あるが、高円寺の言い分は正しい。実際に日本の法律には優先席を譲らなければならないというものは存在しない。逆にOL見たく親切心で席を譲らせようとしている人たちが強要罪で訴えられる可能性があるんだ。

「私は健全な若者だ。確かに立つことには不自由はいっさい感じない。だが、座っている時よりも立っている方が体力を消耗させるのは明らかだ。意味も無く無益なことをするつもりにはなれないねえ」  
「そ……それが、目上の人に対する態度!?!」

高円寺に完璧に言い返されたOLは優先席を譲るという話を辞め高円寺の態度を注意し始めた。確かに、今の高円寺の態度はいいものとはいえないな。いくら会社の社長の息子で未来の社長と言ってもこんな自分勝手な社長の下では働きたくはないな。つてかこいつが社長になったら会社は倒産するじゃないか？

「目上？君や老婆が私より長い人生を送っていることは事実だが、目上とは立場が上の人間を指す言葉なのだよ。それに君も問題はある。歳の差があるとしても、生意気極まりない実にふてぶてしい態度ではないか」

「なっ……!あなたは高校生でしょ!?大人の言うことを素直に聞きなさい!」

しかし、高円寺の態度を注意したOLは、自分自身の態度を高円寺に注意されてしまった。もう言い返す言葉が無くなったのかOLは「言うこと聞きなさい」と強制的な言葉を発した。

「も……もういいですから」  
「どうやら君よりも老婆の方が物分がいいようだ。老婆は残りの余生を存分に謳歌したまえ、まあ、明日には死んでしまうかもしれないがな」

この光景を見て見かねた老婆がOLを宥めた。高円寺は無駄な爽やかなスマイルを決めるとイヤホンをつけ爆音ダダ漏れで音楽を聴きはじめた。俺もそうだが乗客全員が高円寺の態度、そして最後の高円寺の言葉にイラツとしただろう。だが、誰も高円寺に言い返そうとする者は誰もいなかった。言い返したらOLのように吊り上げら

れるからだ。

「・・・・・・・・すみませんでした」

OLは必死に涙を堪えながら、老婆に小さく謝罪をした。このOLの謝罪で誰もがこのやり取りは終わりを迎えると思っていたがそうはいかなかった。

「あの・・・・・・・・私も、お姉さんの言う通りだと思うな」

そう、ここで櫛田がこのやり取りに参加したのだ。

「今度は、プリティーガールか。どうやら今日の私は思いのほか女性運があるらしい」

「お婆さん。さつきからずっと辛そうにしてるの、席を譲ってもらえないかな？席を譲れば社会貢献にもなると思うんだ」

高円寺はイヤホンを外し櫛田の相手を始めた。櫛田の言う通りここで老婆に席を譲れば100%社会貢献になるのは間違いないだろう。しかしそれは、高円寺が社会貢献に興味があればと言う話したが。

「社会貢献か。確かにお年寄りに席を譲ることは、社会貢献の一環だ。しかし、残念ながら私は社会貢献にはいっさい興味が無い。それと、こうして、優先席に座っている私だけをやり玉にあげているが、他にも居座り黙り込んでいる者もいる。それは放っておいていいのか？お年寄りを大切にするという心があるのなら、そこは優先席、優先席ではないなど、些細な問題でしかないと思っただがね」

「皆さん。少しだけいいので、私の話を聞いてください。どなたかこのお婆さんに席を譲ってもらえないでしょうか？誰でもいいのでお願いします!!」

俺が思った通り高円寺は社会貢献にはいっさい興味が無かった。もし、これで社会貢献に興味があったら驚きたがな。

櫛田は高円寺はもう席を譲らないと関心したのか今度は俺たち乗客に向かって席を譲って欲しいと頭を下げお願いしてきた。

ここで、社会人女性が手を上げ席を譲るのだがあいにくその女性は下を向き手を上げようとはしていなかった。どうやら原作通りにはならないらしい。

俺はため息ついたあと手を上げこう言った。

「俺が席を譲るよ」

「本当にいいの？」

「ああ、別にもうすぐ、降りるつもりだしな」

「そう、ありがとうね！」

俺の発言に櫛田は驚いていた。なんか驚かれるのも少しあれだな。俺は取り敢えず席をどいた。櫛田は俺にお礼を言うと老婆を連れ俺が座っていた席に向かい老婆を座らせた。

俺は老婆に席を譲ったあと高円寺の元に足を運んだ。

「なあ、アンタちよつといいか？」

「プリティーガールの次はクールボーイか今度は何の話だい？」

「話ってことほどではないけど、ただ一言言いに来た」

「ただ一言か、なら早く言ってほしいんだが」

「じゃ、一言。あまりに調子乗ってるとすぐに足元すくわれるぞ」

俺は高円寺の真正面に立ちそう言った。俺の言葉に乗客全員が反応した。高円寺はしばらく黙ったままだがすぐに口を開いた。

「実におもしろいことを言うね、君とは今後とも親しくなれそうだ」

「俺はなれないと思うけどな」

「私の名前は高円寺六助、高円寺コンツェルンの一人息子だ、よろしく頼むよクールボーイの名はなんつて言うんだい？」

「俺は、けんざき つるぎ 剣崎 剣。普通の高校生だ」

俺は高円寺が俺に言い返すと思っていたが、この考えは間違っていた。高円寺は俺に言い返すどころが俺に自己紹介をし俺に自己紹介を求めた。どうやら、俺は何故か高円寺に気に入られたらしい。

俺は高円寺に名前を名乗ったあと高円寺から離れた所で立ちながら鞆の中に入っていた本を取り出し読書を始めた。

### 3話 クラス

あれから、数分後バスは目的地である高度育成高等学校に到着した。バスの乗客ほとんどが高度育成高等学校に入学する少年少女だったため俺がバスを降りる頃に車内にはあのOLや老婆そして数人の社会人しかいなかった。

「おー、やっぱ、デカイな」

バスを降りてからしばらく歩くと天然石を連結加工した作りの門が見えてきた。俺はその門を見上げ言葉を漏らした。アニメでもこの門は少しだけ出ていたがやはり生で見た方が大ききなどはしつかりと理解できるな。

「ねえ、そこに居られると邪魔なんだけど」

「あつ、悪い」

俺が門を見上げていると後ろから声をかけられた。後ろを振り返るとそこには目つきが鋭く水色のショートカットが特徴的な少女伊吹濤<sup>いぶき</sup>が立っていた。どうやら、俺は伊吹の邪魔になっているようだった。俺は一言謝り少し横に移動した。

「ねえ、アンタ、バスの中であの金髪と最後言い合ってたわよね」

「えっ、そうだけど、それがどうかしたか？」

「いや、よくあんな面倒臭い奴に言いあえたもんだと思って」

「まあ、確かにアイツ<sup>高円寺</sup>は面倒臭いけど、一言言いたかったからな」

伊吹は俺の横を通り過ぎず俺に話しかけてきた。どうやら、俺が高円寺と言いつつ俺を見て俺に興味を持ったらしい。

「まあ、こんなところで話すのもなんだし、歩きながら話そうぜ」  
「分かった」

俺はいつまでもここに居るわけにはいかないと思い、伊吹に歩きながら話そうと提案した。俺は断られると思っていたが伊吹はすんなりと了承してくれた。

「ねえ、剣崎は何クラス？」

「D。伊吹は？」

「私はC」

「うまい具合にわかれたな」

「だね」

あれから、歩きながら俺たちは自己紹介をした。まあ、俺は最初から伊吹の名前は知ってたけど、一応自己紹介をしないとイケないからな。そして、俺たちはクラス割りが張り出されている場所に到着し互いに自分の名前を探し何処のクラスか確認した。

確認した結果俺はDクラス。伊吹はCクラスとなった。この学校は3年間クラス替えが無いため伊吹とは3年間同じクラスにはなれない。折角仲良くなれたのに残念なことだ。

「じゃ、私こっちだから」

「おう、また」

クラスを確認し、俺たちは校内に入りそれぞれクラスの向かった。そして、別れ道に辿り着き俺は右に伊吹は左へとそれぞれ違う方向に向かった。

「ここが、Dクラスかなんかワクワクするな……」

俺はDクラスの扉の前で一言呟いたあと、教室の扉を開けた。すると、教室内ではほとんどの生徒が登校しておりほとんどの生徒が騒がしくしていた。

俺は教室を見渡しながら自分の席へと向かった。俺の席は窓際だった。より詳しく説明すると主人公綾小路清隆あやのこうじの前の席だ。隣は確かアニメだと台湾の女子生徒王美雨ワンメイユウ通称みーちゃんのはずだが、そのみーちゃんは席を立ち櫛田と話しているため確かめようが無い。

俺は暇なので、少し原作キャラを観察することにした。まず、正ヒ

ロインの軽井沢かるいざわ恵はイケメン少年平田洋介ひらた ようすけや綾小路のことが好きな可愛いギャル佐藤麻耶さとう まやや来週発売されるはずの11・5巻で綾小路に接触を測ろうとする松下千秋まつした ちあきなどと話していた。

腹黒女櫛田桔梗くしだ ききようは台湾の女子生徒みーちゃんと裁縫が得意な大人しめな女子生徒井の頭心いのがしら こころと話していた。

他にも高円寺は机に足を乗せくつろいでおり、三馬鹿の池いけ治かんじ、山内春樹やまうち はるきの2人は席が前後のため仲良く雑談していた。最後の三馬鹿須藤建すどう けんは高円寺どうよう机に足を乗せくつろいでいた。

俺がしばらく原作キャラたちを観察していると後ろの扉から主人公綾小路と一応ヒロインの堀北鈴音ほりきた すずねが入ってきた。綾小路は俺の後ろに座り鞆を横にかけ頬杖をつき窓を眺め始めた。堀北は鞆を机の上に置いたまま本を取り出し読書を始めた。

「(なんか、話しかけられないな……)」

せっかく、綾小路か堀北のどっちかと話そうと思ったのが堀北は読書に集中してしまい話しかけられず、先程まで窓の外を眺めていた綾小路はいつの間にか寝てしまっていた。

「皆、少し話を聞いて貰ってもいいかな？」

すると、イケメン少年平田が立ち上がり、俺たちに呼びかけた。どうやら原作でもあった自己紹介タイムのようだ。早速俺は自分の自己紹介の内容を考え始めた。



## 4話 自己紹介

平田の提案はやはり自己紹介だった。平田はまず自身の自己紹介を終えると次に自己紹介をしてもらおう生徒を選び出した。結果最初の平田の標的となった生徒は1番端に座っていた井の頭だった。平田はあくまで自然に井の頭に確認を取った。井の頭は平田からの言葉に対応しようし慌ててしまい自己紹介を囁んでしまった。

そんな、井の頭に軽井沢を筆頭に数人のクラスメイトが「がんばれ〜」「慌てなくても大丈夫」などと声をかけた。しかし、この声かけは井の頭にとってはただのプレッシャーになるだけだ。それに、声をかけていた生徒数人もクスクスと笑ってるし面白半分で井の頭に声をかけているだけだろう。

「ゆっくりでいいよ。慌てないで」

しかし、櫛田だけは違った。櫛田は他の生徒たちとは違う声かけをした。この言葉はプレッシャーにはならず逆に井の頭を落ち着かせることに成功した。表の櫛田は普通に友人思いなのに何故あんな性格になってしまったのか残念でしようがない。

井の頭は櫛田の声かけのお陰で落ち着きを取り戻し無事ど自己紹介を終えることが出来た。

「次はその君お願いできるかな?」

「おう、任せろ!!」

平田の指名を受け元気よく立ち上がったのは三馬鹿の1人で原作10巻で退学した山内だ。

「俺は山内春樹。小学生の時は卓球で全国に、中学時代は野球部でエースで4番だったけど、インターハイで怪我をして今はリハビリ中だ。よろしく」

早速俺の転生特典フェイクセンサーとやらが反応した。どうやら、相手が嘘をついているかどうかはこの目で分かるらしい。まあ、これが無くっても山内が嘘をついているって分かるけどな。元々インターハイは高校の体育大会であって中学生は出れないはずだしな。

「じゃ、次は私だね!」

次に立ち上がったの櫛田だった。櫛田は平田の指名を受ける前に自分自身の判断で席を立ち上がった。どうやら、櫛田は自己紹介の順番を確認していたらしい。以外にちゃんとしており驚きだ。

「私は櫛田桔梗と言います、中学からの友達は1人もこの学校に進学してないので1人ぼっちです。だから早く顔と名前を憶えて、友達になりたいと思っています」

櫛田の自己紹介は井の頭や山内他の生徒たちと違い一言で自己紹介を終えなかった。櫛田の自己紹介はまだ続いた。

「私の最初の目標として、ここにいる全員と仲良くなりたいです。皆の自己紹介が終わったら、是非私と連絡先を交換してください。放課後や休日は色んな人と遊んで思い出を作りたいので是非誘ってください」

やはり、この櫛田は他の生徒たちとは違った。井の頭へのかけた言葉も適当に励ましたのでないと分かる自己紹介だった。原作通り櫛田は男子に人気が出るな、だって今この教室にいるほとんどの男子生徒が櫛田に注目しメロメロ状態だしな特に池と山内はその目線を違うところに移した方がいいと思うが

櫛田の自己紹介も終わり平田は促すように次の生徒に視線を送った。すると、次の生徒は自己紹介を始めず変わりに平田に強烈な睨みをきかせた。強烈な睨みをきかせた生徒は髪を真っ赤に染め上げた不良という言葉がピッタリな生徒だった。この不良の生徒は須藤だった。

須藤は平田を睨んだままこう言った。

「俺らはガキかよ、自己紹介なんて必要ねえよ、やりたい奴だけでやれ」

「僕に自己紹介を強制させる権利はないけど、クラスで仲良くしていこうとすることは悪いことじゃないと僕は思うだ。それでも君に不愉快な気持ちをさせたのなら謝りたい」

この時点でこのヒーローは平田、悪の敵は須藤となってしまう。須藤が言っていることも一理はある。実際自己紹介を行わない高校も複数存在する。だが、それでも、平田が言っていることは正しい意

見でもあった。この学校ではクラスの仲良くなければこれから起くる試験などをクリアすることはできないだろう。

俺がそんなことを考えているといつの間にか平田の周りには軽井沢たちでは無く違う女子生徒たちもいた。いつの間にも移動したんだ？平田を囲んでいる女子生徒たちは須藤に向かって「自己紹介くらいいいじゃないの」「そうよそうよ」などと口にした。

「うっせえ、こっちは別に、仲良しごっこするためにココに入ったんじゃないよ」

須藤は平田に向かって怒鳴ったあと、席を立った。どうやらこの教室から出て行くようだ。須藤が席を立ち上がると他の男子生徒たちも数人席を立っていたその中に1人だけ女子生徒の姿があった。堀北だった。堀北も原作同様自己紹介には反対のようだった。

そして、少数の生徒たちが教室を出て行ったあと教室に残った多くの生徒たちは自己紹介を続けた。今立ち上がっているのは三馬鹿の1人池だった。

「俺は池~~ヲ~~治。好きな物は女の子で嫌いな物はイケメンだ。よろしく!!」

池はウケ狙いでは無く、本当に彼女が欲しいのか嘘をついてる様子はいっさい無かった。ってかフェイクセンサーにも引つかかってないし本気なんだろうな。

「すごい、池くんカッコイイ」

と女子生徒の1人がフェイクセンサーを使わずとも完璧に嘘だと分かる無感情な声で言った。だが、池はそれが嘘だと信じずちよつと恥ずかしそうに頬をかいた。その瞬間笑いをこらえていた女子生徒たちはいっせいに笑い出した。

「じゃ、次はその君お願いできるかな？」

「え？」

「いや、君じゃなくなつて、後ろの君なんだけど」

「ああ、そう」

池の自己紹介が終わると平田は次の生徒を指さした。平田が指さしたさきは俺だと思いい俺は声を出したが違った。平田が指さしたの

は後ろの席の綾小路だった。

「え？俺？」

「うん、君、お願いできるかな？」

どうやら、綾小路も次に自己紹介をするのは俺だと思っていたらしく、少し動揺していた。だが、すぐにその動揺は無くなり席を立ち自己紹介を始めた。

「えー……えつと、綾小路清隆です。その、え……得意なことは特にありませんが、皆と仲良くなれるよう頑張りますので、えー、よろしくお願いします」

綾小路の自己紹介が見事に失敗した。自己紹介が終わりすぐに起こる拍手もパラパラと起きていた。だがそんな綾小路にも平田は優しく声をかけていた。俺は綾小路の自己紹介を聞き次に自己紹介をする奴は地獄だなと思っていた。

「じゃ、次は飛ばしちゃったけど、君お願いできるかな？」

「え？」

まさかの、俺だった。1度飛ばされていたからもう自己紹介のタイミングは無いと思っていたがまさかこの場面で自己紹介が回ってくるとは思いもしなかった。俺は1度息を吐いたあと席を立ち上がり自己紹介を始めた。

「剣崎剣。特技はスポーツ全般が得意だ。だけど、部活には入る気は無いのでよろしく」

なんとか自己紹介を終えることが出来た。生前は普通に言っていた自己紹介も今の状況となると少し緊張したな。

俺の自己紹介が終わると同時に教室を出て行った須藤や堀北たちが教室に戻ってきた。

「お前たち、席に座れ」

堀北たちが教室に戻ってきてから数秒後、前の扉が開き黒いスーツを着た1人の女性が教室へと入ってきた。それと同時に始業を伝えるチャイムも鳴り響いた。

## 5話 高度育成高等学校

教室に入ってきたスーツの女性は、俺たちDクラスの担任茶柱紗枝ちゃばしらすえだ。茶柱先生はこの学校高度育成高等学校の説明を始めた。

この学校はやはり、外部との連絡が取れなく敷地内からは出れないようだ。そのため3年間生徒たちが快適に過ごせるように敷地内には、コンビニ、スーパー、映画館、カフェ、カラオケなどがある。

アニメ1話で少しだけカラオケの描写が写ったことを俺は覚えていた。俺の記憶が正しければ10人ぐらいの生徒たちが普通に入れるほど大きかった気がする。いつか、クラスメイトたちを連れて行ってみたいものだ。

「先程配った学生証カードでは、敷地内にある施設を利用したり商品を購入することが可能だ。まあ簡単に言えばクレジットカードみたいな物だ。そしてこの学校内でポイントで買えないものは無い」敷地内の説明を終えた茶柱先生は、学生証カードの説明を始めた。この学生証カードではカラオケや映画館などの施設を利用したりスーパーやコンビニの商品を購入することが出来るが俺は今月はあまりポイントを使わないようにしようと思っっている。だってそうしないと来月の配布ポイントは0ポイントだからな。

「因みに、このポイントは毎月1日に自動的に振り込まれるようになっていて。お前たちには現在平等に10万ポイントが既に支給されている。ポイントは1ポイント1円だ」

この茶柱先生の言葉を聞いた、生徒たちはざわつき始めた。まあ、ザワつくのも無理もないだろう。高校生の俺たちにとっては10万円というお金は大金の分類に入る。

「ポイントの支給額に驚いたか？この学校では実力で生徒を測る。入学を果たした時点でお前たちにはそれだけの価値と可能性がある。このポイントをどう使うかはお前たちの自由だ。それと最後に忠告だポイントが無くなったからってカツアゲや詐欺のような行為だけはするなよ、その場合は学校側が厳しい処罰を下すそれだけは

忘れるなよ」

「質問は無いようだな、では、8時15分から入学式が始まる。それまでにトイレなどをすまし体育館に移動してくれ」

茶柱先生はそう俺たちに告げると入ってきた扉から退室して行った。

:

「みんな、そろそろ8時になるから教室の外に出て並んでから体育館に移動しよう」

茶柱先生が退室してから、しばらく教室で雑談したり昼寝をしたりしていると平田が席を立ち上がり俺たちにそう呼びかけた。確かに今の時刻は8時になるかならないかの時間だ。移動手段などを含めれば妥当な時間だろう。

平田の言葉を聞いた主に女子生徒たちが平田を援護するように寝ている男子生徒を起こしたり、平田に反発している男子たちを黙らせたりしていた。何とも女子は恐ろしい存在なんだろう。

女子生徒の力もあり8時5分前には移動を開始が出来た。

？

8時5分前に教室を移動した俺たちは体育館に3分前に到着した。俺は体育館に到着し驚いたことが1つある。それは、俺たちを除いた

ほとんどのクラスが既に到着し綺麗に整列しているのだ。そして1人も私語を口にしていない生徒はいなかったのだ。

平田は自分たちが他のクラスを待たせていると思い急いでCクラスの隣に並び俺たちを整列させた。因みにCクラスの横を通り過ぎた時視界に伊吹が入ったので軽く手を振ってみると伊吹は嫌な顔をしていた。

俺たちが整列し終わってもどうやらまだ他のクラスが到着していないらしくまだ入学式は始まらなかった。入学式が始まる1分前に飛び込むかのように3年D組が体育館に到着した。3年の先輩たちは自分たちが待たせていると自覚しているらしく急いで3年Cクラスの隣に整列した。

「え、全クラスが整列しましたので、これから平成27年度第〇〇回入学式を始めます」

全クラスが整列し終わると、壇上に1人の男性教師が現れ入学式の開式の言葉を口にした。

それから、入学式は順調に進み長い校長の話に新入生代表の話に最後に何故か生徒会長の話を終えた。

「え、以上をもちまして、平成27年度第〇〇回入学式を終わりにします。」

こうして、無事に入学式を終えた。俺たちはそのままクラスに戻った。クラスを戻りしばらくすると茶柱先生が入ってきた。

また、何かあるのかと思ったら明日の予定を簡潔に話そのまま帰りのHRは終わった。

## 6話 コンビニ

「あつ、剣崎君少し待ってくれないかな」

「何だ、平田？」

帰りのHRも終わり、俺は席を立ち上がると平田に声をかけられた。最初は無視しようと思ったがここで無視をしたら他の女子生徒たちとの交流が途絶えてしまうと思ひ平田の頼みを聞くことにした。

「いや、大したことじゃないんだけど、剣崎君と連絡先を交換したくって」

「あく、連絡先ね、別にいいけど」

「ありがとう、じゃ剣崎君の連絡先を教えてくださいでもいいかな？」

「別にいいけど、ほら」

平田の頼みは俺と連絡先を交換することだった。別に平田と連絡先を交換することは嫌なことじゃないため了承した。すると、何故か平田自身が自分の連絡先を教えるのでは無く俺の連絡先を聞いてきた。

俺は少し不思議に思ひながらも端末を取り出し連絡先を平田に見せた。平田は端末を覗き込み俺の連絡先を登録した。

「ありがとう剣崎君、あと、少し端末を覗いたけどもう僕以外と連絡先を交換してるんだね」

「ああ、登校中に仲良くなってな、まあそいつとは別のクラスだけだな、じゃ俺帰るからまた明日」

「うん、また明日」

なんかこの平田って原作に比べると少し不気味な雰囲気があるな、やっぱ原作と性格が少し違うのか？まあいいか。それより今日はコンビニに寄ってみたいし早く帰るか。

俺は平田と連絡先を交換したあとそのまま教室を後にした。



？

教室を出て廊下を歩いていると伊吹からチャットが届いた。端末を起動するとチャットの内容は以下のものだった。

【伊吹】

漣 今日帰りコンビニに寄らない？

コンビニのお誘いだった。俺は元々コンビニに寄るつもりだったので「いいぞ」と返信した。するとすぐ伊吹から返信が来た。

【伊吹】

漣 じゃ、下駄箱の所で待ってるから

俺は「了解」と返信し、伊吹を待たすとうるさそうだから伊吹が待つ下駄箱へと急いだ。

？

「待たせたな」

「別にあんま待つてないし、大丈夫」

「そうか、じゃ、早速行こうぜ」

「ええ」

下駄箱に到着すると、伊吹は端末を弄り暇をつぶしていた。俺は伊吹に声をかけると伊吹は俺に気づき小走りで俺に近づいてきた。どうやら、あまり伊吹を待たせていなかったらしく伊吹の機嫌は良いままだった。

俺たちは合流すると直ぐに目的地であるコンビニへと向かった。

「ねえ、ポイントのことについてどう思う？」

「ポイント？ん〜まあ、俺が言えることは少なからずポイントは残しておいた方がいいと思うぜ」

茶柱先生の口ぶりからは必ず毎月10万ポイントが貰えると思っ込んでしまいがそれは違い、本当は必ずしも毎月ポイントを貰えるかは分からないのだ。これは俺が原作知識が無くても茶柱先生の言葉からして分かる事だ。まあほとんどの奴はそんなことを考えず後先考えずポイントを使いまくるだろうな。そうなれば原作通りDクラスの来月のポイントは0になるだろう。

「へえ〜、やっぱアンタもそう考えるのね」

「アンタもって？お前のクラスの中にも気づいてる奴はいるのか？」

どうやら、伊吹が所属しているCクラスに在籍している生徒の中にもポイントについて理解している奴がいるらしい。まあCクラスでポイントについて理解出来ている奴は龍園と金田と椎名ぐらいだろう。

「確か、龍園って奴が気づいてたと思うけど、なんかニヤニヤしてたし」

「龍園ね〜、まあ、取り敢えず龍園には気をつけた方がいいぜ」

「龍園に？アンタ龍園のこと知ってるの？」

「いや、直接の面識は無いけど、少し小耳にはさんでな」

「ふ〜ん、分かった。取り敢えず龍園には気をつけることにする」

「ああ」

原作通りならば龍園の性格はアレなため、逆らうと伊吹にも被害がいつてしまうだろう。まあ実際伊吹は龍園に反発してアルベルトにほん投げられたりしてるしな、ここで龍園のことを言っておいても間違えは無いだろう。

？

俺と伊吹はそれからこの学校のことを話しながらコンビニに向かい数分後何事も無くコンビニに到着した。俺は今日の夕食を購入するため弁当売り場に急ぎ、伊吹は生活用品が購入したかったのか生活用品が揃っている売り場に向かった。

結構このコンビニは弁当の種類が多かったが、悩んだ末大好きな麻婆豆腐を手に取りカゴの中に入れ伊吹がいる生活用品の売り場に向かった。

生活用品売り場では、伊吹がシャンプーやリンスやボディソープなど様々な生活用品を籠に入れていた。あの伊吹でもやはりシャンプーなどには拘りがあるらしい。俺は原作で綾小路が堀北に勧めた5枚刃を伊吹に勧めると伊吹は少し顔を赤くしながらも思いつき俺の太ももに強烈な蹴りをおみまいした。

普通の人間なら、この蹴りを喰らった場合は普通に痛がるが俺は転生特典イマジンプレイカーが発動しほとんど痛みは無かった。そして逆に俺の太ももを蹴った伊吹が痛がっていた。俺の太ももはそんなに固くはないと思うだが………。

「………。ねえ、剣崎、これどう思う？」

「ん？無料コーナー？」

しばらく痛がっていた伊吹は何事も無かったように目に入った無料コーナーの存在を俺に聞いてきた。

「うくん、まあ、あれだろ来月以降ポイントを貰えなかった生徒に対しての救済処置だろう」

「ふくん、やっぱり龍園やアンタが言った通り少しはポイントを余らせた方がいいみたいだね」

この無料コーナーは、来月以降ポイントを一切貰えなかった生徒に對しての救済処置なのは確かだろう。まあここでこんな処置をとっておかないといくら外部との連絡を遮断されていると言っても少し

は問題視されるだろう。それを見越してこんな救済処置を用意したのだろう。

それから、俺と伊吹は無料コーナーからそれぞれ歯ブラシとボックステッシュユなど2つの生活用品を籠に入れお菓子などが並んでいるコーナーを見ていると伊吹がある事に気づいた。駄菓子などが置かれている場所に1人の女子生徒が不自然な行動をしていた。この女子生徒は1年Aクラスの神室真澄だった。神室は万引きを坂柳に見られ脅さいいように使われている少し可哀想な女子生徒だ。

今回もまあ、万引きをしようとしているのだろう。まあよく入学式初日に万引きをしようと思ったな、俺は取り敢えず神室が駄菓子を鞆に入れる前に伊吹に耳打ちで先に支払ってから先に帰るように指示を出した。伊吹は少し不満げだったが、今度埋め合わせをすると言ったらすぐ了承してくれレジに向かった。なんとも動かしやすいのだろう。

俺は伊吹がレジに向かい、神室が鞆に駄菓子を詰め込んだのを見てから神室に近づき、神室の腕を掴みこう言った。

「おい、万引きは辞めた方がいいぜ」

「……!?!」

「ちよつと、こつち来て!」

「はあ?・ちよ……」

神室は万引きの腕に自信があったのか、俺に万引きをしている所を見つけたことに対して驚きの表情をしていた。だが、すぐ何時もの表情に戻り俺の腕を掴みそのまま俺を店の外に連れ出してしまった。